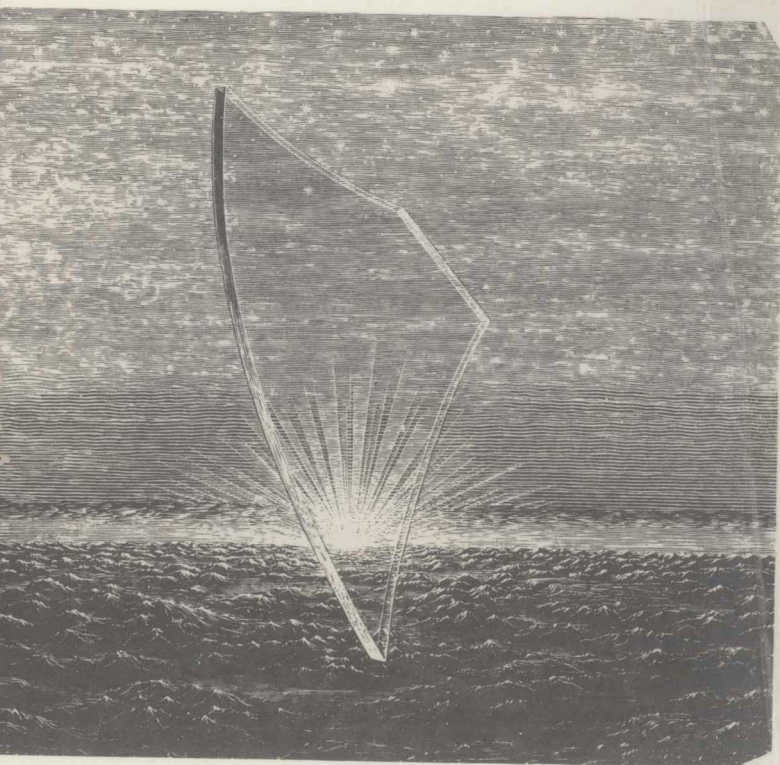


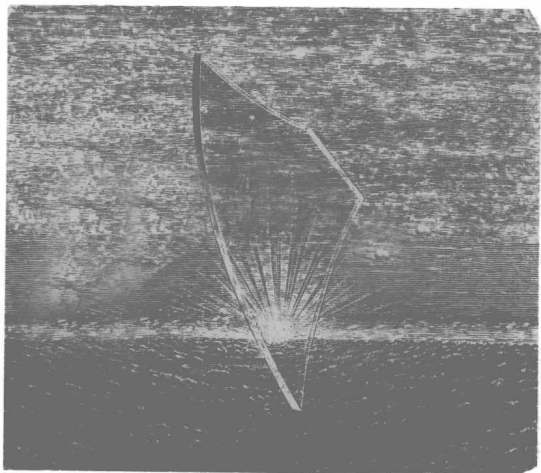
山川健一

さよならの挨拶を



さよならの挨拶を

山川健一



中央公論社

さよならの挨拶を

定価二二〇〇円

©一九八一

昭和五十六年十一月十日初版印刷
昭和五十六年十一月二十日初版発行

著者 山川 健一

発行者 高梨 茂

印刷 三晃印刷
製本 小泉製本

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二丁目一七

番 振替 東京二二三四

検印施止

さよならの挨拶を

I

1

公園のあちこちに、ひとつの傘に入つた若い男女の姿があつた。イルミネーションできらびやかに飾りたてられたホテルへ連れ込む前に、彼女の欲望をオブラートでくるんでやるのに、ここは絶好の場所なのだらう。

愛情と欲望は、ぼくのしみつたれた経験からすれば、焼きたてのトーストとバターみたいなものだ。男たちは囁き続ける、愛してゐるよ愛してゐるよ愛してゐる——。そして、当の男自身も、パンとバターの見分け方を忘れてしまっている。結局のところ、蛙みたいに脚を広げさせて、プラスとマイナスを擦り合わせるだけの単調な作業なのに。

雨が降っているというのに、おまえら犬みたいに舐め合いくっついて腰が立たなくなるまでやらないと気が済まないんだろう。

ぼくの方はと言えば、傘もないからずぶ濡れた。スニーカーはたっぷり水を含み、ジーンズも裾から膝のあたりまで重たく濡れている。夏だというのに、冷たいくらいだ。

喉からんだ痰を、ぼくは黒く光る路面に勢いよく吐いた。せめて、彼らのなかに、何組もの彼らのなかに、若く幸福な愛し合っている恋人どうしがいることを祈るばかりだ。そうでないと、ぼくの方が気が滅入ってきそうだった。

公園を通り抜け、芸術大学の前を通り過ぎると、坂道が多くなった。坂のある街は好きだ。横浜とか長崎みたい、そのうえ港が見おろせて、いつも乾いた風が吹いていればもう言うことはない。

もちろん、ぼくは不能なんかじゃないし、ホモでもない。しかし、雨に濡れて一人公園を歩きながら、それでもなお女の子の股の間の黒々とした一匹の虫を求める程のエネルギーはないというだけのことだ。

飲み屋が軒端を並べる一画を通り過ぎる頃から、また一層木立ちが深く、高くなってきたようだ。木立ちのなかには、寺と墓地がある。樹々の下を歩くと、大粒の水滴が背中に落ちる。軀が冷えきってしまい、喉も痛み始める。少し熱っぽくもある。子供の頃から、ぼくは扁桃腺が弱かったのだ。

路が、石畳に変わる。濡れた石の面が、水銀燈の光を映して、ガラスの破片を撒いたように輝いている。

今日、ぼくは午過ぎから新宿へ行った。その時は、まだ傘を持っていた。駅の売店で、透明のビニールを張っただけの安物の傘を買ったのだ。歌舞伎町あたりをうろついている、髪を染めてリーゼントにしたアンチャンに、シンナーかトルエンを分けてもらうつもりだった。

中学の時に、友人たちと中古車の塗装を専門にやっている町工場から業務用の十リットル入りの罐を盗み出し、クラスの連中に売りさばいていて教師に見つかり、その後教師と父親にこっぴどくとちめられた時には、もうやめるつもりだった。

だけど、ぼくはいつだって夏が怖くて、しかもどうして怖いのか少しもわからなくて、そのことがさらにぼくの感覚を磨ぎ澄ましているようなのだ。今年の夏はとりわけ退屈で、もちろん退屈でない夏なんてマイアミにもジャマイカにも南アフリカにも、この地球の上にはどこにもないのかもしれないと考えながら、もしかしたらこの退屈そのものがぼくの怖れの感覚の源なのかもしれないと気がついた。

傘にとび込んで来たのは、しかしリーゼントでも赤毛でもなく、色の白い少年だった。まず、ぼくのブルーのシャツを誉めてから、C壘一本千円だけど、何本要るの？ と尋ねてきた。一本でいいんだと答えると、それじゃあ一緒にロウソクも買ってくれ、と言う。ぼくと同年ぐらいの、気の弱そうな男だった。

ぼくを駅のトイレに待たせておいて、そいつはコイン・ロッカーに商品を取りに行った。戻って来ると、ロッカー代金込みで千二百円だと言う。そこまでは、順調だったのだ。

ところが、そいつはホモだった。ぼくのアパートに來ないか、エルもあるんだとか、それが駄目ならサウナへ連れて行ってよとか、甘ったるい声で話しかけながら軀をすり寄せてきた。

可哀想な奴だと思った。こいつがそれで喜ぶのなら、別に寝てやつてもかまわないかもしれない。そいつは、瘦せていて、色が白く、二つの眼だけが奇妙にいかがわしい感じで、まるでぼくは鏡に映った自分自身を見る思いがした。

だがこのぼくは、彼のアパートへも、もちろんサウナへも行かずに、いきなり少年の鼻を殴りつけ、下腹を蹴りつけ、軀を二つに折って蹲ったそいつの顔を蹴り上げたのだ。

ひどいことするなよ、ひどいことしないでくれよ！ と、まるで女の子みたいな声で叫びながら、そいつはシャツを鼻血で汚した。

もうぐったりした少年を、ぼくはそれでもなお痛めつけることをやめなかった。そうする自分を薄気味悪く感じながら、しかしぼくは蹴り続けた。

中年の紳士が入って来て、息を呑むようにぼくらを見た。ぼくは赤い絵具を拭いたポロ切れみたいな少年に唾を吐き捨て、金も払わずに逃げたのだ。

傘は、その駅のトイレに忘れて来てしまった。

石畳を踏みしめながら歩くと、やがて広い墓地へ入った。石畳はその墓地を真直ぐ突っ切り、

向こうの街に続いていた。雨に煙る薄闇のなかに、無数の石塔が並んでいる。石塔の下には、燐光色に光る滑石のような骨のかけらが埋められているのだろう。いやもう艶もなくなり、碎けて白い粉になっているだろう。やがてそれも土や砂と区別できなくなる。

小降りだった雨は、霧雨に変わっている。処々にかたまっている樹々は、水銀燈の光がぼんやり吸い込まれてしまう闇の中で、さらに濃い闇を切り取っている。植物という感じはしなかった。

石畳を左に折れしばらく歩くと、ぼくは御影石の石塔の前で立ち止まり、同じ石材で作られた柵に立ち小便した。放尿しながら煙草を喫おうと思ったが、紙袋のなかの煙草はぐっしり濡れてしまっている。石塔の前には竹の筒が立てられ、百合の花がさしてある。石塔には何か文字が彫り込んであったが、ぼくには読めなかった。

石塔の後ろに回り、立ったまま凭れかかると、ポケットからガラス壺とビニール袋を取り出す。背中がひんやり冷たかった。

ビニール袋の底に、壺のなかの透明なドロリとした液を垂らすと、袋の口をすぼめて鼻と口に当てがう。深く息を吸いこみ、目を閉じた。口と鼻から喉の奥へ、軽い刺激のある気体が降りていき、肺に広がる。

血液が凝固したようなしこりが、ゆっくりと、頸から後頭部の方へ広がっていった。そしていきなり、その熱い砂漠の風のようなものは昇りつめ、頭のとっぺんへ抜ける。軀中の筋肉が一挙に弛緩してしまったような解放の感覚が訪れる。ほんの一瞬、目の前の世界が歪んで見える、太

陽のクレーターが見える、ぼくはそのコロイド状の赤く輝く海へ堕ちて行く、ぼくの世界は赤い海だけだ、他には何もない。

銀色の細かな粒が、頭のなかを転がり始める。粒が触れ合う硬い音が聞こえてくるようだ。寒い、寒さは軀の芯の方からやって来る、膝が慄えている。もう一度、気体を吸いこんだ。石塔に凭れかかったまま、軀がずるずると滑って、ぼくは膝を折って尻をついた。濡れた石から水が滲みて、尻も冷たかった。

頭を膝で挟みこみ、ビニール袋に頭を突っこむようにして、気体を吸い続ける。よだれが細い糸のように、絶え間なく袋の底に落ちる。袋の底には小人が見える。裸の小人たちが争いながら糸を登って来ようとする。なかには血を流したり、眼球が卵みたいに流れ出てしまっているものいた。

できる限り深く息を吸って、肺を銀の粒子で一杯にした時、遠くで銃声が響いた。今頃どうして銃声が聞こえたりするのだろう……。

そうだ、あれは小学校の頃の運動会の、百メートル競走の出発の合図なのだろう。皆が走りだす。澄んだ空と冷たい秋の空気の中に、皆が走る後ろ姿が見える。だけどぼくはどうしても走ることができない。

そんなことが、飴の棒のように続く時間のずっと向こうであった。なぜぼくは走れなかったのだろう、短距離競走では、いつも一等の赤いリボンをもらっていたこのぼくが。きっと、ぼくは

出発の合図の銃声を聞き逃してしまったのだ。それが今頃になって耳に届く。

だけでも遅い、レースは終わったんだ。運動会ももうとくに終って、第一、体操服姿の友だちだって今ではもうどこにもいないじゃないか。レースは終わったんだ。

目を開けると、ガラスの壘が足許に転がって、液体が口から零れていた。そうか、この音だったのか。壘を拾って、蓋を閉める。零れた水飴みたいな液体を指で拭いて、ビニールの袋に擦りつける。

袋を鼻と口に当てがい、息を吸う、今度は小人ではなく、半透明のガラス玉が見えた。ガラスの玉には虹のような色がついていた。そして、それは笑っている。肩を寄せ合い、ガラス玉はけたたましく笑っている。気がつくと、一緒にぼくも笑っている。苦しい、それでも笑いはとまらない。背中がごつごつ墓石に当る。痛みは感じなかったが、ぶつかるところに微かに熱を感じた。笑い疲れたぼくは、膝を抱き、寒さを堪えながら石のように軀を硬くした。時折、腹の奥の方から、思い出したように笑いがこみ上げてくる。

尻と背中はいっかり御影石が支えていてくれるのに、どこまでも深く自分が沈みこんでいくような気がする。ガラス玉になって、底のない闇のなかへ沈んでいく。見慣れた通学路の風景や、馴染みの本屋や、姉を叱りつける母、街で見た洋酒のショウ・ウインドウや雑踏が、あつという間に通りに過ぎていった。そうか、横に広がった世界から、今自分は縦に零れ落ちてゆくところなんだ。

その時、耳の傍でぶつぶつ囁く低い声が聞こえていることに気がついた。それは、もうずっと前から聞こえているらしかった。ぼくの軀は沈むのをやめ、そこがどこなのかってことはよくわからなかったが、ともかくどこかに固定されたようだった。

低い声は、ぶつぶつと、誰かに話しかけるともなく続いていた。

ああ、やりきれんな、とその声は聞こえた。どこかで聞き覚えのある声のようだった。そう考えるとすぐ、ぼくはそれがミミズクの声であることに気がついた。ミミズクが話しかけてくるんだなあ、ぼくに何か伝えようと思って。寒いんだろうな、頭のなかは腐り始めているし。すると、ここは森のなかだ。

——ああ、やりきれんな、もう百年経つ、わしがこの森へやって来てから百年経つ。いや実際はな、あんまり古いことなんでよく覚えてないのさ。おまえのような青二才には、このやりきれんという気もちがわかるうはずはないな。第一、この森のなかの寒さというものがわかるうはずがないじゃないか。どうだ、寒いかな？

——うん、とても。やりきれないよ。

——そうか、寒いか。わしの方はもう大方慣れてしまったがね。この森はこの辺りで一番空に近い。寒いのも道理だな。雨が降ってるとなるとなおさらだ。そうか、おまえも寒いと。しかし、おまえにはあの杉の木の梢で揺れている陽光の美しさといったものが、その向こうに僅かに見える澄んだ空の美しさといったものがわかるうはずはないな。森の底から見上げる空の美しさか、

おまえにわかるか、おまえに見えるか？

——見えるよ、綺麗だよ、とつても。

——莫迦を言うな、あの美しさといったものは、こうして長い間森に閉じこめられておらなればとうていわかるものではないんだ。

——ああ、皆がそう言ってたよ。おまえには何もわかるはずがないって。

——左様、おまえは愚かな眼をしとるよ。わしの眼を見ろ、赤いルビーみたいに輝いておるだろう。どうした、おまえ慄えているな、そんなに寒いかな。

——うん、寒いよ。

——そこは風が強い、こっちへ来い。この樗けやきの洞ほらのなかへ来い。いくらかは違うかもしれないから。

——動けないんだよ。

——そうか、動けんのか……。まだ若いのに、わしと同じだ。深い森のなかで囚われの身だ。おまえ、名前は何というのだ？

——アキラ。

——うん、アキラか。今からわしが言うことをよく聞けよ。森は深い、どこまでも続いている、だからそこを動いちゃならん。そしてな、空を見上げちゃならんだ。本当は杉の梢で撥ねてる陽光や若葉の輝きなんてものを見ると、眩暈がして気が遠くなって、身を滅ぼしかねないのさ。

それから本当は何も考えんのが一番いいんだが、そういうわけにもゆかんだらうから、寒さのこ
とだけを考えるのさ。冬になったらもっと寒くなる。痛いほどさ。森は雪に閉ざされて、陽光も
ここまでは届かなくなる。そうになったら、わしが冬を眠ってやり過ごす方法を教えてやる。何だ、
涙なんか零したってしょうがないじゃないか……。

どのくらいそこに蹲まっていただろう。ふと気がつくと、寒さで歯が鳴っていた。ぼくは目を
開いた。御影石の柵の間から、黒い土が覗いている。水たまりができています。雨はやんで、空の
端に月が出ていた。

空の高みを、雲が流されていくのが見えた。雲の表が、月の光を浴びて銀白色に光っている。
雲を眺めながら、ぼくはハンカチで鼻をかんだ。

傍に転がっているガラスの壺をポケットに入れ、ハンカチとビニール袋もたたんで胸のポケッ
トにしまった。石塔につかまりながら立ち上がり、ふらふらと石畳の方へ出た。

2

墓地を出て少し歩くと、淫らな映画の看板があった。雨に濡れ、下に貼ったポスターが透け、
裸の女が二重に見えていた。